放射線災害医療サマーセミナー2017

報告書

【日時】2017 年 8 月 25 日（金）
【場所】福島県双葉郡川内村
【主催】公益財団法人　笹川記念保健協力財団
　　国立大学法人　長崎大学
　　公立大学法人　福島県立医科大学

【参加者】
近藤英明（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学講座地域医療学分野　助教）
品川博光（長崎大学医学部医学科 5 年）
下川洋輝（長崎大学医学部医学科 5 年）
松島俊樹（長崎大学医学部医学科 4 年）

【フィールド実習】
08：30　川内村役場集合、遠藤村長挨拶
09：00　仮置場見学（大津辺仮置場）
10：00　ふれあい・いきいきサロン参加
13：00　高山食品放射能簡易検査場実習
15：00　川内村国民健康保険診療所見学

【フィールド実習まとめ】
8 月 21 日月曜日から行われている放射線災害医療サマーセミナーの川内村でのフィールド実習に合流した。サマーセミナーには長崎大学や鹿児島大学保健学科等の学生も参加していた。

1. 村長挨拶
　「村民の誇り」を取り戻すことを村長は今後の目標にされていた。今までは、山菜や魚などを取り、食し、売り込むことが、この村の民としての「誇り」だった。しかし、今は失われてしまった。今後、別の「村民の誇り」を見つけていきたいと語られていた。福島県内で最も早く帰村を決定した村長からの印象深い挨拶であった。

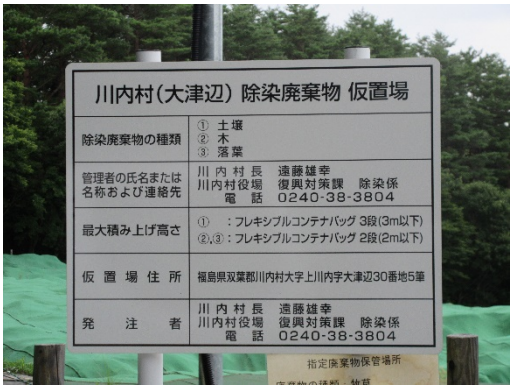
2. 仮置場見学

産業振興課除染係の担当の方と福島芳子先生のガイドで町内をまわり、住居とその周囲、田畑の除染について説明を受けた。民家の庭にある土などの地表 5cm までの土をはぎ取り、多くの民家では砂利が敷き詰められていた。民家周囲の木の枝も地表から一定の部位まで枝切りが行われていた。庭には美しい花を栽培されている家が多いことが印象的であった。

その後、汚染土壌等の仮置場を見学した。川内村では住民の方の協力もあり、使用されなくなった牧草地等が仮置場としていち早く活用され、除染も早い時期から行われていた。汚染土壌等は一袋 1 万八千円もする耐久性を高めた特殊なコンテナバッグの中に入れて保管されていた。広大な敷地内一面、見渡す限り防水シートに覆われた多数のコンテナバックが保管されていた。

仮置場は山中の行き止まりに作られていた。見学当日はあいにくの雨であったが、仮置場に通じる道路は、運搬用大型トラックの通行を妨げないように道路周囲の草刈り、枝落としが行われていた。生活区域の除染は概ね終了していたが、除染土壌は増え続けているとのことであった。

土を大切にする農家の方としては田畑の除染は苦渋の決断を強いることになり、当初は、事情を説明しても反対されることがあったそうである。一方、広大な山林の除染は全くできていない状態であった。



3. ふれあい・いきいきサロン参加

ふれあい・いきいきサロンでは、保健福祉課の方が中心となって高齢者の方々を対象に健康体操等が公民館で行われていた。天候は雨であったが、8 名の住民の方が参加されていた。

長崎大学医学部からの参加者は体操から参加した。最初は首や肩の運動など基本的な整理体操を行い、体をほぐした。続いて、頭の活性化のためにリズムに合わせて手足でじゃんけんの形を作るリクレーションを行った。次に、マッサージボールを使って手足のマッサージを行い、最後に棒を使って演歌歌謡のリズムに合わせて、独自の体操を行なった。演歌のリズムということもあり、住民の方々は楽しそうに口ずさみながら体操されていた。

体操の後は風船を使ってバレーボールをし、住民と学生が入り混じって 2 チームに分

かれてラリーの回数を競い合った。バレーボールでは大いに盛り上がり、住民の方々も学生も笑顔であふれていた。その後、高齢者の方の肩や手足を学生がマッサージし、参加の皆様は満足そうな笑顔を浮かべられていた。

運動の後にはお茶の時間があり、住民の方々と歓談した。川内村で採れたトマトやキュウリの浅漬けも振る舞われた。最後には住民の方々の予定を聞いて、保健福祉課の方々が次回のサロンの日程を決定されていた。住民の方々が帰る際のお見送りもしたが、車で来ている方、自転車で来ている方がおり、その元気さに驚いた。始まりから終わりまで笑顔が絶えないとてもいい会であった。

4. 高山食品放射能簡易検査場実習

村内で栽培・採取された食品の放射能検査は、帰村されて 1 か月後より公民館などを利用し開始されていた。元消防士やコンビニ経営者等、震災前は全く別の職業の方々が担当されていた。当初は装置の販売元から指導を受けながらのスタートだった。住民から原発への非難を受けたり、放射能について質問されたりしたことも多く、「私たちにも分からないし、どうしようもなかった」など苦労話を伺った。

実際の検査では持ち込まれていた野菜の放射能測定を見学した。食品を細かく刻んでの測定と、非破壊での測定の 2 種類の測定が行われていた。いずれも地元の畑で栽培されていたものであったが、基準値未満であった。検査件数は減ってきており、野菜など栽培されている作物で基準値を超えることはほとんどないと伺った。

しかし、野生のキノコ、たらの芽等の山菜、イノシシ肉、ヤマバトやイワナなどからは基準値を大きく超える放射能が依然として頻繁に検出されるとのことだった。毎月の測定結果は公表されており、前記の食品はいまだに出荷や摂取が制限されていた。

5. 川内村国民健康保険診療所見学

診療所では今年度より勤務されている長崎大学出身の血液内科を専門とされている木村悠子先生からお話を伺った。診療所のスタッフは、医師・看護師 2 名・医療事務・一般事務の 5 名で構成されていた。週 1 回の整形外科、月 1 回の眼科、心療内科、月 2 回の上部消化管内視鏡検査が専門外来として行われていた。

診療では「自分の専門外の患者さんの診療、精密検査が出来ないこと、及び、緊急の対応」に困るとのことであった。適宜、医療連携を活用されており、ドクターヘリでの搬送も経験されていた。福島医大には 15 分で搬送可能であった。

川内村では、メタボリック症候群の該当者が男性は全国平均とほぼ同じであるが、女性では 20.5%と全国平均の約 2 倍であることが問題となっていた。さらに、高齢化率が 39.1%と高くなっていた。通院困難者も多く、在宅医療の充実が今後の課題となっていた。